広島文教女子大学紀要　42，2007

ハムレットはオフィーリアを愛したか（第二部）

三　戸　祥　子

"I lov'd Ophelia"
——Is Hamlet's Love Truth?——

Sachiko Mito

第四章　美は貞潔を腐蝕する

オフィーリアは，第二幕第二場に見るように，ハムレットからの恋文を父に，そして王と王妃に明かしてしまうばかりか，ハムレットを陥れるための策（策略）にさえ手を貸そうとする。その策（策略）とは「王子の異変は禁じられた / 拒まれた恋から生じた狂気なり」とするポローニアスの進言を単純には入れようとしない王のため，オフィーリアを囮として放ち，ハムレットとのやり取りから，疑いなく狂気か否か，また，偽りの狂気であるならその真意を探ろうとすることであった。第三幕第一場，世に言う「尼寺の場」がそれである。ハムレットが，これもまた，知る人ぞ知る第四独白 'To be or not to be.....' に始まる独り語りを口にする場でもある。

ハムレットがまさに「生くべきか，はたまた死すべきか」その迷いを断ち切れぬまま，独白を語り終えんとするその折も折，聖書を手にしたオフィーリアの姿を目にするところから「尼寺の場」は始まる。(注1)

Hamlet: ——— Soft you now!
The fair Ophelia.———Nymph, in thy orisons
Be all my sins remembered.
Ophelia: Good my lord,
How does your honour for this many a day?
Hamlet: I humbly thank you; well, well, well.
Ophelia: My lord, I have remembrances of yours
That I have longed long to re-deliver.
I pray you now receive them.
Hamlet: No, not I;
I never gave you aught.
Ophelia: My honour'd lord, you know right well you did,
And with them words of so sweet breath compos'd
As made the things more rich; their perfume lost,
Take these again; for to the noble mind
Rich gifts wax poor when givers prove unkind,
There, my lord. (ActⅢ. i . ll. 88-102)

「尼寺の場」の注目すべきことのひとつは，ハムレットの言葉の真意が読み取れぬ / 汲み取れぬことには変わりはないものの，ここでは，オフィーリアが珍しく己自身の言葉によって，最も知りたきこと，確かめたきことを一貫して相手たるハムレットから引き出そうとする点である。しかし他方，この二人，互いの言葉と心が噛み合うことはない。第三幕第一場のハムレットは，ポローニアスから（例の恋文の）言葉の稚拙さを謗られた第二幕第一場とは打って変わって「言葉」を駆使して愛を語る。但し，あの「恋文」のように直截に伝えることはしないため，オフィーリアにその思いの分かろうはずもないのである。結果，オフィーリアは「言葉」に翻弄され，ついにはハムレットの狂気を確信するに至る。

前置きはこのあたりで留めておき，上記の引用文に目を転じることにしよう。

引用文前半においてオフィーリアから発せられるのは，型通りの挨拶に続いて，父の言いつけに従って贈り物を返そうとする言葉であり，未だ，オフィーリア自身の言葉とはいえない。しかし，後半になると，ハムレットが贈り物を与えた覚えはないと応じたことによって，思わぬ応答に衝撃を受けたオフィーリアは，父の意を映す鏡の役割に留まっておれず，本心より反駁する。切実なる声音をもって「確かに贈り物を下さったはず。あなた様御自身がよく御存知のはずではありませんか」オフィーリアには，忘れがたい愛の証しの贈り物である。それを目にするだけで，どのようにして手渡されたか，どのような言葉とともに求愛がなされたか，たちまち，一枚の絵となって立ち現れる——まさしく，愛の記憶を鮮明に蘇らせる縁（よすが）であった。それを，こともなげに男は “No, not I; / I gave you aught” と言い放ったのである。黙して引き下がることなどできようか。

「芳しく，甘美な御言葉を添えて下さった贈り物ではありませんか」永遠の愛を誓うハムレットがその証しに，と手渡したことをよもや忘れた，などとは言わせぬ——との思いがあった。その愛の言葉ゆえに，あなた様からの贈り物もいっそう美しく，尊く思われましたものを……なんと攀れない御方か。オフィーリアは，自身の矛盾に気付かぬまま不満と不安を胸の内に感じてしまうのである。「今となっては，贈り物に宿った愛の芳しさも失せました」と言わずにはおれない。そればかりか，驚くべき糾弾を続ける。「贈り主の御心が冷え切ってしまった以上，愛の詞によって高められたはずのこの贈り物の価値も失せ衰えました。」と。だが——‘When givers prove unkind’ (l. 101) —とは聞き捨てならぬ。「これは異なこと」と，女の咎め声にハムレットは承服しかねる思いであったに違いない。何故なら，そもそも，第一幕第五場，父ポローニアスからもはや会うことならず，と恋の進展を禁じられて以来，愛を拒んだ「攀れなき人」—— ‘unkind’ なる ‘lover’ とはオフィーリア自身ではなかったか。言うならば，‘unkind givers’ でなく ‘unkind receivers’ であるはず。そしてなにより注意せねばならぬのは，そもそも衝撃を受けていたのはハムレットではなかったか，ということである。こうして（久しく会わぬ二人が）顔を合わすやいきなり，“I have remembrances/ That I have longed long to re-deliver.” (ll. 95-96) と，かつて与えた贈り物を差し出す女——その驚き！しかも，いかにも事務的に突っ返されては耐え難きことこの上なし。「知らぬ，与えた覚えなどない，儂（わし）ではない」と男が応ずるも無理なきこと。無論，この応答，狂人を装うための応答と取れなくはない。しかし，むしろここは本心からの驚き・衝撃が口をついてあの言葉となって現れたと解すべきであろう。

ところが他方，“No, not I; / I never gave you aught.” と言うハムレットの返答に，劣らぬ衝撃を受けたオフィーリアが先の抗議にも似た言葉を口にすることになるのである。そして，

オフィーリアのこの衝撃に沿って彼女の言葉を追うなら，'when givers prove unkind' (l. 101) というあの言葉は，第一幕第五場に遡って，それ以後第三幕第一場に至るまでの間に起こったと思われるハムレットの心変わりを指して，咎めているのではないことが分かってくる。たった今耳にしたハムレットの返答 "No, not I; / I never gave you aught." (ll. 97-98) —この言葉の擧れなさ，それを発した語り手の心の擧れなさをこそ，咎めているのである。

贈り主の心変わりが明白となったとき，愛の証しである贈り物そのものの価値も無に帰する。それは，古来よりの真実。それをなお，手元に置くのは誇りある恋人（女であれ，男であれ）の為すべきことではない。引用中の 'the noble mind' とは，一般的普遍的な意味での「(恋する者の) 誇り高き精神」を指しており，定冠詞 the は総称の the と解すべきところである。そうであるからこそ，givers も冠詞を伴わぬ複数形（すなわち「贈り主・giver」の総称，一般化）であり，これに先行する gifts も然りである。したがって，'the noble mind' は単独個別にオフィーリアを指しているのではない。無論，それと同時に「誇り高きもの」の一人として彼女自身を捉えていることも確かでありはするが。(注2)

さて，こうしてオフィーリアからの真っ向勝負の抗議を込めた宣言と贈り物の返還を受けて，ハムレットはどう応じるのか。

Hamlet: Ha, ha! Are you honest?
Ophelia: My lord?
Hamlet: Are you fair?
Ophelia: What means your lordship?
(Act Ⅲ. i . ll. 103-106)

"Ha, ha!" と高笑いをあげて，"Are you honest?" と問いただすハムレット。この時，'honest' には二つの意味が合わせ込められている。ひとつには，直前のオフィーリアの言葉は「正直な心」がそう言わせているのか？　すなわち，"Rich gifts wax poor when givers prove unkind," (l. 101) と言うけれども，果たして本当にそう思ってのことか？と，文字通り「正直さ」を問う言葉としての 'honest' である。事実は，君の心変わりなり。会わぬ，言葉も交わさぬ，文も受け取らぬ，そしてたった今も贈り物を返すと言うは君なり。それを，このハムレットに心変わりの咎を求めるのは見当違いというもの。そうした思いの込められた語として 'honest' を解するなら，それはいわば，逆にハムレットの方から抗議と非難を込めて Are you honest? とやり返したことになる。

今一つは，この直後にハムレットが披瀝する beauty-honesty 論——beauty は honesty を腐蝕し駆逐するという論——との関わりから考えるときに浮かび上がってくる新たな 'honest' の意味である。実は，honesty という語は，「正直さ」という意味とは別に，女の美徳を示す「貞潔」を表わすことのできる語である。従って，chastity と同義ということになる。そして，問題のハムレットの言葉 Are you honest? の意味を考えるとき，honesty の形容詞形である honest を「貞潔である: chaste」の意に取るなら，ハムレットは「オフィーリアよ，君は貞潔・純潔なる乙女か？」と女の唯一絶対の美徳の有無もしくは保持を問いただしていることになるのである。

そして，この時のハムレットはおそらく，この両者の意味を込め——すなわち，「正直さ」と「貞潔さ」の二つを同時に問う言葉として，Are you honest? なる問いを口にしたものと思われる。

しかし，それが「正直さ」を疑われるにせよ，「貞潔さ」を疑われるにせよ，オフィーリアに不快の念を抱かせることに変わりはない。いずれの点においてもやましさのない身には，我が身に覚えのない中傷を浴びるようで心外であった。信じ難い思いに駆られ“My lord?”と逆に問いただす。ところが驚くことに，ハムレットは彼女の不可解な思いを解くどころか，それを無視するかのように“Are you fair?”と次なる問いを発するありさま。その真意をまったく測りかねるオフィーリアである。愛の証しである贈り物を贈ったことも，甘美なる言葉で求愛を重ねたことも否定するばかりか，こうして女に面と向かって，honest なるか，fair なるか，と問うなど人を愚弄してあまりある振る舞いではないか。

しかし，この時，ハムレットにはハムレットならではの理由があった。オフィーリアによる「愛の真実」をめぐっての抗議を断ち切って，殊更に“Are you honest?”あるいは“Are you fair?”と矢継ぎ早やに問うハムレットは一見，脈絡を欠き，しかもオフィーリアを困惑させるだけでなく，傷つけさえする理不尽さを感じさせる。だが，それは，ある意図が込められてのことであった。

Hamlet: That if you be honest and fair, your honesty
should admit no discourse to your beauty.
Ophelia: Could beauty, my lord, have better commerce
than with honesty?
Hamlet: Ay, truly; for the power of beauty will sooner
transform honesty from what it is to a bawd than the force
of honesty can translate beauty into his likeness. This was
sometime a paradox, but now the time gives it proof. I did
love you once.
Ophelia: Indeed, my lord, you made me believe so.
Hamlet: You should not have believ'd me; for virtue
cannot so inoculate our old stock but we shall relish of it.
I loved you not.
Ophelia: I was the more deceived.

(ActⅢ. i . ll. 107-120)

ハムレットは女の二つの美徳――内なる美徳としての貞潔，すなわち honesty と，外なる美としての美貌，すなわち beauty とは互いに相容れぬものであることを，比喩を用いて説く。言うまでもなく，引用文中の‘honesty’は‘chastity’を示し，内的美徳を指している。一方，‘beauty’は文字通り，顔を含む姿形の美しさを指している。

ハムレットに言わせれば，相容れぬというよりは，むしろこの両者を交わらせてはならぬ，ということになる。何故なら，交われば，一方が他方を必ずや傷つけ，汚す運めを避け得ぬためである。仮に，女が外なる美 beauty とともに，貞潔の美徳 honesty を合わせ備えて（美の理想を体現して）いようとも，やがては外見の美を（自然の女神から）与えられているが故にこそ，内面の美 honesty を変様させてしまう危機に見舞われずにおかぬからである。引用文中，‘transform’(l. 112)，‘translate’(l. 113) はともに，本来のものとは似ても似つかぬ，まったく別のものへの変様を表わす語である。ハムレットは，これらの語を用いて，外見の美 beauty はその力によって，内なる美 honesty を女衒 bawd に変様させるとまで言う。女の美

beauty を目にする男の情欲は，その外見の美の誘惑に屈して，女に内なる美 honesty を捨てることを迫らずにはおかぬ，いまや貞潔の鑑 honesty は bawd に成り果てたり，というわけである。

そして，女もまた，肉体の美を備える女であれば，男からの誘惑を受ける時，たとえ内に貞潔の美徳を本来備えていようとも，その力—honesty の力をもって，美と情欲の誘惑に抗うことができるのか，と言えば，さに非ず。貞潔の美徳 honesty/ chastity の力など，とうてい肉体の美beauty の（腐蝕）力には及ばぬ。「貞潔」喪失の源（元凶）である beauty を感化し，穢れなき美徳である honesty に近付けようなど及ぶべくもない。むしろ beauty に屈して貞潔の美たる honesty を自ら放ち，汚してしまうのである。

しかし，ハムレットは何故，'bawd'（l. 112）などという卑猥さを暗示する語までも用いて，貞潔の美徳の脆さを言い立てるのか——。それは，母ガートルドの中にこの内なる美 honesty の変様と崩壊を見たからに他ならない。ハムレットにとって亡き父と母は他に類を見ぬ理想の男女を体現する存在であった。理想の愛のあり方でもあった。ところが，母は父王の死後一ヶ月も経たぬうち，父とはその資質において天と地ほどの差もある叔父（ガートルードにとっては義弟）クローデイアスと再婚してしまう。父の亡骸に取りすがり，涙の干くこともあるまい，と思うほどに泣き崩れたのも束の間，今やクローデイアスに組るを生きる糧とし，至福に酔うかの如き風情である。この変様を目の辺りにしては，"Frailty, thy name is woman"（Act. I . ii . l. 146）と，女への不信を露わにするに至っても不思議はなかった。(注3)

母こそ「beauty による honesty の腐蝕」の動かぬ証しであった。あの貞女の鑑（と信じた女）の変様！　ハムレットは，自らの愛する女オフィーリアの身の上にも同様の運め，"Frailty, thy name is woman"（Act I . ii. l. 146）と，悲痛の叫びを挙げさせずにおかぬ運めが必ずや訪れる——そう予期し怖れた。

だが，オフィーリアには，ハムレットが母の再婚によってどれほどの衝撃を受けたか，そのためにどれほど深く，拭い難い女への不信に襲われたかなど想像の埒外であった。ましてや，彼女は「内なる美と外なる美の合一」をこそ真の理想とし，また現実にその合一の存在を信じて疑わぬ乙女であった。"Could beauty, my lord, have better commerce than with honesty?"（ll. 109-110）と問うのは，それがためである。しかし，ハムレットはその問いにこう応える。「かつては（オフィーリアの信じるように）外見の美 beauty が内なる美 honesty を腐蝕するなど戯言，と世の人は信じていた。しかし，今は現にその証拠が挙がっているのだ。」と。引用文中の 'proof' とは，いうまでもなくガートルド（とクローデイアス）によって実証される「貞潔の美の変様・腐蝕」の具象を指した語である。このとき，聞き手であるオフィーリアに，その嫌悪こもる告発が誰に向けられたものであるか，果たして察し得たものか否か疑わしい。

ハムレットはといえば，何を思ってか，ここで一転「私はかつて君を愛した」と，俄かに話を二人の問題に転じてしまう。美と貞潔の不和など，説いたとして何の益あろうか。到底，目の前の乙女には分かり得ぬとでも断じたのか。ハムレットの複雑なる胸のうちをよそに，オフィーリアは "I did love you once"（ll. 114-115）というその言葉を救いと感ずる。たとえ唐突であれ，オフィーリアにとって，この言葉こそ待ち望んだ愛の証しであることに違いない。「本当にそうでした。そう信じさせても下さいましたわ。」と歓喜の声で応じる。ところが喜びも束の間，「私の言葉など，信じてはならなかったのだ」——ハムレットは足下に愛を否定してしまう。またしても翻弄に過ぎぬのか。混乱する乙女に止めを刺すかのような "I loved you not" という言葉は，オフィーリアを絶望と悲嘆の淵に沈めてしまうのである。

だが，我々は，ハムレットが“You should not believed me”（l. 117）と言った後に続く言葉を見過ごしてはならない。何故「信じてならないか」その理由を語っているからである。ハムレットには，彼自身がオフィーリアを娶ることによって女のおぞましき変様から守ることは，叶わぬ夢であった。それは単に，女というものへの不信だけが障害となって立ちはだかっているのではない。ハムレット自身の体内を流れる血に因が潜んでいた。“Frailty, thy name is woman”（Act I . ii. . l . 146）と言わしめた女，ガートルドの血を分け持つ生であるハムレットは，自己に対する不信をも抱えていたのである。「貞潔」を自ら汚した血統は，オフィーリアの備える純潔を本来のあるがままの姿として生かしめる力を持たぬ。いや，そのようなことは許されぬと言うべきであるかもしれぬ。ハムレットの‘old stock’（l. 118）は，既に（生母ガートルドの血を体内に分け持つため），‘relish of evil’すなわち，悪の種を宿しており，美しく穢れなき（オフィーリアの）血をそこに接木することなど儚き夢，いやむしろ，その命／純潔の命を死に至らしめることに他ならなかった。

第五章　尼寺へ行け——“Get thee to a nunnery”

オフィーリアは，ほんのひととき王子の愛を信じた。ようやくにして，ハムレットその人自身の口から「オフィーリアを愛していたこと」が語られた，と。彼の（かの）人が互いの愛を確かな事実として認めたのであった。だが，安堵の胸を撫で下ろすのは未だ早すぎたようである。ハムレットは，その舌も乾かぬうちに「愛してなどおらぬ／愛したことなどありはせぬ」と言い放つのであるから。

恋文によって，また，直接相対して求愛を受け，数々の贈り物を賜ったことは，すべて戯れであったとでも言うのであろうか……「王子」の地位と威光を背に，世間知らずの娘を欺いたと言うのであろうか。「お前は，信じてはならなかったのだ」などと，今になってそのような言葉を耳にしようとは夢にも思わなかった。絶望と混乱が襲ってくる。しかし，ハムレットはなおもオフィーリアの困惑を深めようとするかのように，不可思議の言葉を報いて迫り来るのであった。

Hamlet: Get thee to a nunnery. Why wouldst thou be
a breeder of sinners? I am myself indifferent honest, but
yet I could accuse me of such things that it were better
my mother had not borne me: I am very proud, revenge-
ful, ambitious; with more offences at my beck than I
have thoughts to put them in, imagination to give them
shape, or time to act them in. What should such fellows
as I do crawling between earth and heaven? We are arrant
knaves, all: believe none of us. Go thy ways to a nunnery.
Where's thy father?
Ophelia: At home, my lord.
Hamlet: Let the doors be shut upon him, that he may play the fool
nowhere but in's own house. Farewell.
Ophelia: O, help him, you sweet heavens!

(ActⅢ. i . ll121-134)

「尼寺へ行け」——女にとって修道院に身を寄せるとは，単に世俗の生活を絶つのみならず，男の元に嫁いで子をもうけることを自ら拒絶することを意味する。ハムレットは，かつて愛した女にその道を行けと言う。世俗を忘れ，神に嫁して祈りの生活を終生送るようにと迫るのである。何故か。

女は，結婚によって，神の教えに背く資質を背負った人間 sinners をこの世に送り出す恐れのある母となるからである。引用文中の “Why wouldst thou be a breeder of sinners?”（Act Ⅲ. i . 121-122）という言葉には，何故に女は，そしてオフィーリアは自ら好んで悪しき命，罪を背負った生を産み落とさんとして結婚に馳せ参じるのか？　見よ，このハムレットを。「正直さはまずまずとしても，その美点を損なう欠点は数知れぬ——自惚れ，執念深さ，野心，その他想像も絶するほどの悪しき汚点多々あり，この命，与えし生母を恨めしく思うほどである。」この世に，これほどのおぞましき人間が更に新たな生を受けてなんとする？

「男に嫁ぐ」などという愚かしい夢など捨てよ。その先には「罪深きもの—sinners の母」となる運命しか待ってはおらぬ。よって，男（世のすべての男）の誘惑（に満ちた言葉）に屈して結婚の道を選んではならぬ。引用文中の “We are arrant knaves: believe none of us”（l. 128-129）の ‘We’ そして ‘us’ は，ここでは男全般を指す人称代名詞として用いられている。すなわち，女を結婚へと導き，breeder of sinners となるべく手を貸す悪党としての男である。ハムレットは，我々男を信じてはならぬと言いつつ，先ほどの「お前はこの私の言葉を信じてはならなかったのだ」と，愛を否定したあの言葉をここで暗に反復しているのでもある。だが，その含意が果たしてどこまで，オフィーリアに伝わっていたであろうか。

この呪うべき運め— breeder of sinners の運め—から身を衛る道はひとつ。神と信仰の世界である ‘nunnery’ をおいて他にない。世俗を絶ち，男の情欲の誘惑を拒み，神の御手に我が身を委ねてこそ，女は sinners の母となる運めを免れ得るのである。そして，自己の外なる美 beauty故に，内なる美 honesty 貞潔の美徳を自ら汚し，bawd の奈落へと陥っていく運命にも抗うことができるのである。たとえ，オフィーリア自身の知力と想像力では，この理（ことわけ）を分からずとも，ハムレットは「穢れなき美の理想」を切望してやまぬ。オフィーリアをオフィーリアたらしめるため，二つの美の穢れなき融合を失わぬための道として，Get thee to a nunnery!と叫ばずにはおれぬのである。それは，女を愛するが故の叫びの声，願いの声であった。

こうして，オフィーリアを守らんがため，願いをこめて Get thy ways to a nunnery と命ずるハムレットであったが，突然，はたと我に返った如く “Where's your father?”（l. 130）と，直前の言葉とはまったく脈絡を欠いた問いを向ける。(注4) この瞬間早や，ハムレットは，大義を背に負う青年王子に返り，女の目に「狂人」の姿を焼き付けんとする人となっていた。そしてその思惑通り，オフィーリアはもはや，ハムレットを真の狂気と信じて疑わなかったのである。たった今の今まで，哲学的人間観を口にしていたその人が，やにわに，「父はどこか？」とは何事であろう。やはりハムレット様は狂われた。もはやこれまで。私の愛の夢も絶えた。それにしても，なんという変わりようであろうか。神々にすがって元の姿に返していただくことが叶うものなら……と叫ぶ乙女——— “O, help him, you sweet heavens!”（l. 134）

他方，ハムレットは，このオフィーリアの悲嘆を見るや，更にその悲しみを増し，惑乱させ，狂気を確信させるつもりか，恐ろしい挑発を試みる。しかもそれは，まぎれもない女（女全般）への呪詛でもあった。「貞潔」の衣をものの見事に脱ぎ捨ててしまう女への諧謔的な呪詛である。

Hamlet: If thou dost marry, I'll give thee this plague for
thy dowry; be thou as chaste as ice, as pure as snow, thou
shalt not escape calumny. Get thee to a nunnery, go,
farewell. Or, if thou with needs marry, marry a fool; for
wise men know well enough what monsters you make of
them. To a nunnery, go; and quickly too. Farewell.
Ophelia: O heavenly powers, restore him!

(Act Ⅲ. i . ll135-141)

女が，どれほど一点の曇りなく，「貞潔」を体現していようとも——雪の白さに喩えられる穢れなさ，情欲の誘惑など寄せ付けぬ堅固な砦の如きたたずまい，氷に触れればこうかと思うほどの冷淡さ，——そのようなものは何の力にもなりはせぬ。世間の中傷という奴を相手にすれば，ひとたまりもない。「貞女」の誉れなど汚辱にまみれてしまうのだ。そのような中傷の脅しなど意に介さぬ，と言うなら結婚せよ。だが，いずれ，世間の中傷のつむじ風（旋風）は容赦なく吹きつけてくる。その風を避ける道はただひとつ，神の元へ急ぐことだ——Get thee to a nunnery, go, farewell. (ll. 137-138)

ただし，不本意ながら（経済の事情から）男の元へ嫁すというなら，「阿呆」を選べよ。阿呆ならば女（妻）の浮気に気付きはすまい。知恵の回る男は，寝取られ亭主よろしく，己だけ無知のまま，暢気に鼻の下を長くして女房にしてやられる，などということはまずないからな。引用文中の 'monsters' (l. 140) とは，女の不貞を知って嫉妬し，その激しい嫉妬のせいで頭に角を生やした姿を怪物に譬えたものである。頭のよい男は，女房の裏切りを必ずや見抜くもの。亭主を怪物男にしてしまうような，結構な / けしからぬ女の振る舞いを先刻ご承知である，とハムレットは言うのである。せめて，己のあからさまな恥，美徳の裏切りを白日に曝すような無様を演じまいとすれば，阿呆な男を夫に選べよと。上辺だけでも「貞潔」の妻で通し抜くことのできる相手を選べというわけである。

もとより，ハムレットの真意はそこにはない。女への呪詛と見まがう辛辣な言葉の裏にはオフィーリアへの切ない思いがある。真意は，阿呆の亭主を素知らぬ顔で欺くこととも，賢い男に嫉妬の角を被せることとも，オフィーリアには無縁であって欲しいのである。永久に（とこしえに）純潔の美の体現であって欲しいのである。しかし，この悲痛なるハムレットの願いの届こうはずもない。苦悩の愛は，従順の人，オフィーリアの知力と想像力には及ばぬものであった。

女を徹底して誹謗するハムレットのこの言葉に驚愕し，いよいよオフィーリアは王子の狂気が疑いないものと信じるに至るのみである。彼女にできることは神の力に縋ることだけであった。"O heavenly powers, restore him!" (l. 141) だが，この狼狽，この悲嘆をよそに，更にハムレットは，女への呪詛によって，その「美の仮面」を剥がそうとする。

Hamlet: I have heard of your paintings too, well
enough; God hath given you one face, and you make
yourselves another. You jig and amble, and you lisp, and
nickname God's creatures, and make your wantonness your
ignorance. Go to, I'll no more on't; it hath made me mad.

I say we will have no moe marriages; those that are
married already, all but one, shall live; the rest shall keep
as they are. To a nunnery, go.

[*Exit.*

(ActⅢ. i . ll. 142-149)

ハムレットは，女がいかに「変装：disguise」という手の込んだ策を弄して本性を覆い隠し，生息しているかを暴いてみせる。まず，槍玉に挙がるのが「化粧—paintings」(l. 142) である。そして歩き方，話し方，品をつくって男の気を引くその所作。そして，もっとも憎むべき糊塗は，不貞をはたらきながら自分のせいではない，と嘯く，その虚言である。自分は，無知ゆえ，男の誘惑によって wantonness (l. 145) に陥ったにすぎぬと言い訳をする。すべて，女の仮面である。真実の姿は何一つ見せぬ。その外見の美に始まって内面の美「貞潔」までも，すべからく仮面を己に被せて平然と暮らしておる。もう，うんざりである。

"I'll no more on't; it hath made me mad" (l. 146) 女の偽りに満ちた存在は「化粧」を示す語paintings によって象徴されていると言ってよいが，ハムレットはひとつひとつ女の disguise を列挙しながら，吐き気をもよおすほどの嫌悪感に襲われたか，もうこれ以上は我慢ならぬとばかり，女の糊塗ぶりをあげつらうのを中断してしまう。そして最後に，一組を除いて既婚者の婚姻の継続は認める / 生かしてやるものの，新たな結婚は一切禁じる，という言葉を残して立ち去ろうとする。この赦されぬ「一組」とは，無論のこと現王クローディアスと王妃ガートルドを指している。なにやら，劇の結末を暗示していて不気味ではある。それにしても，こうまでもハムレットが「結婚」という営みを強く否定することから分かってくるのは，やはり女という存在に見る変様を憎み，嫌悪することに起因していると考えるべきであろう。

あたかも（女が），この「結婚」という行為によって，あるいはそれを切望することによって，女の変様——beauty が honesty を腐蝕するという変様——が始まり，完結すると信じているかのようである。オフィーリアの本質がどうであれ，彼女もまた，変様の危機に曝される例に漏れる幸運など，あり得ようはずはない。オフィーリアも他のすべての女に同じとすれば，この愛しき乙女を守る道は神とともにあること以外にはない。果たして，オフィーリア自身が神の元に馳せてその純潔なる美徳を死守するのか。ハムレットに確信のあろうはずもない。ただ，"To a nunnery, go." という言葉を与えて去るのみである。それは，執拗と見えるほどに幾度も繰り返し放たれる言葉であるが，語り得ぬ万感の思いが篭められていたに相違ない。

ここまで見てきたように，第三幕第一場後半，ハムレットは，"Get thee to a nunnery" という言葉を繰り返す。(Go thy ways to a nunnery; To a nunnery など変形はあるが，意図は同一である）その言葉そのものの意味も，その執拗さもすべて語り手ハムレットの「愛」に尽きる。目の前の聞き手オフィーリアに対して抱く愛しさが言わしめる言葉である。愛するがゆえに，オフィーリアの変化—その美の変様をもっとも恐れ，かつ憎む思いに突き動かされ，守らんとするあまり，最善の避難場所として神の住まいを選んだのである。したがって，既に論じたように（紀要第41巻），第二幕第一場，そして第二幕第二場と同様，ここ第三幕第一場においても，いや，なおいっそう，ハムレットのオフィーリアに対する愛が偽りなきもの，真実性高きものであることが分かってくる。そして，劇の終幕，第五幕第一場のあの愛の宣言 "I lov'd Ophelia." (ActⅤ. i . l. 264) の証しも，ここに見出すことができるのである。

だがしかし，哀しいことに，あの，反復される言葉が切なる思いの篭った“Get thee to a nunnery”であることは，当のオフィーリアの胸には，ハムレットの願い通りには届かないのである。まして，女への呪詛を口にするその真意を分かろうはずはない。それ以上に，「復讐」の大義という秘密を内に抱えていようなど，知る由もない。大義ばかりか，それ故の苦悩を背負うことが如何ばかりのものであるか，男は明かし得ぬ身であった。無垢なれど無知なる女，されど愛する女，その女 / 人に決して語ることを許されぬ，その悲しさ / 哀しさがハムレットにはあった。そして，無垢の女は自己の喪失のみを嘆く。

Ophelia: O, what a noble mind is here o'erthrown!
The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword;
Th' expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion and the mould of form,
Th' observ'd of all observers———quite, quite down!
And I, of ladies most deject and wretched,
That suck'd the honey of his music vows,
Now see that noble and most sovereign reason,
Like sweet bells jangled, out of time and harsh;
That unmatch'd form and feature of blown youth
Blasted with ecstacy. O, woe is me
T' have seen what I have seen, see what I see.
(ActⅢ. i . ll. 150-161)

宮廷人たちすべてがルネサンス人の理想として憧憬の対象とした王子はここにはない。あるのは，本来の面影をすっかり失った狂気の姿そのものでしかない。ハムレットは，かつて宮廷人の鑑であった。武術に優れ，学問にも秀でた才をみせる青年であった。引用文中にある‘soldier’そして‘scholar’は，そうした宮廷人としてあるべき資質を表わす語として用いられている。まさしく「文武両道」に類まれなる才を輝かせた王子は，宮廷にあってすべての人々の鑑と仰がれ，次代の王としての期待を一身に浴びていたのである。それが今はどうであろう，脈絡を欠いた話し方。人も羨む身のこなしと礼にかなった言動振る舞い，それはもはや幻。それはあたかも，美しい音を響かせていたはずが，今や調和を欠いた，ただの騒音（にしか聞こえぬ乱れた音）をのみ奏でるようになってしまった鐘のようではないか。ああ，すべては狂気の仕業（しわざ）。

オフィーリアは，目の前で起こっていることが未だ信じられぬ思いに捕らわれ，わが身の不幸を嘆かずにおれない。引用末尾，‘what I have seen’とは，「かつて私（オフィーリア）が見た / 知っていたもの」すなわち，かつてルネサンス人の理想と仰がれた王子ハムレットの雄々しくも美しい姿，宮廷人の鑑であり，甘美な言葉によって求愛を掲げた，あの恋する誠の心持つ青年である。そして，‘what I see’とは，「今，私の目にしているもの」すなわち，すっかり変様してしまった狂気の王子ハムレットの姿を指している。この両者のあまりの落差，‘what I have seen’と‘what I see’とのあまりの違いに驚愕し落胆するばかりではない。オフィーリアは，かつてハムレットが，王子としてどれほど人の信頼と敬愛を勝ち得ていたかを知っているだけに，今の様変わりしたハムレットを見るに耐えず，嘆いてあまりあるのである。そしてまた，引用中に明言はされていないが，そうした宮廷人すべての鑑たる青年王子に

愛された自分であることを思うなら，いっそう悲しみと喪失感は深まらずにはおらぬはずである。'what I have seen' という言葉は，愛に満ちた眼（まなこ）で（愛しきオフィーリアを）見つめ，永遠の誓いを捧げたハムレット，愛を信じさせてくれた王子ハムレット，その姿をも含んだ言葉であったに相違ない。

ここにオフィーリアという人物の哀しさ，憐れさの根源がある。それは，ハムレットの愛が偽りと知らず信じたが故の哀しみではない。真の愛であるにかかわらず，それを知らぬまま——確信を持てぬまま——ハムレットの狂気を突きつけられ，それを否応なく受容せざるを得ぬ乙女の醸し出す哀しさである。ハムレットの言葉は "Get thee to a nunnery" を始めとして，語れば語るだけ，ただオフィーリアの困惑を深めさせ，ついには愛の喪失感へと導くに至るのである。

それはある意味で，避けがたい結果（結末）であったろう。何故なら，ハムレットの「狂気」はオフィーリアの目にもっとも強く，かつ正真正銘の狂気と映る必要があったからである。その必要と意図は第二幕第一場以降，ハムレット自身にとって変わらぬ命題であったはずである。だが，狂気を相手に信じ込ませつつ，自己の愛が真実であることを伝えようとすることは，至難である。そしてハムレットは十分にそのことは承知してもいた。覚悟はしていながら，なお試みないではおれぬ故，（相手の）困惑を招く言葉を繰り返し口にするのである。そして一方は，苦悩しつつ愛を伝えんとし，他方は，（想像力及ばず）それが愛の誠を伝える言葉とは露知らず，悲しみの淵に沈み，困惑していく。そして，既に見てきたように，この両者は互いの意図と願いを叶えることなく別れの時を迎えるのである。

やがて，劇の終幕に至って，主人公が誰憚ることなく愛を直截に語ることを自己に許すときは，もはや愛する女は彼方の世界であり，しかも，死をもって互いの愛が成就するといった『ロミオとジュリエット』あるいは『アントニーとクレオパトラ』にあるような結末は与えられていない。劇『ハムレット』は愛（を描くこと）においても悲劇である。ただし，単に愛が成就せぬという意味での悲劇ではなく，また，愛に関わる主要なる人物が死に至るという意味での悲劇でもなく，愛を本当の意味で交わすことをなし得なかったが故の悲劇である。（その悲劇の因としては，オフィーリアの美とされている純心さ，従順さが大きく関わってくると思われるが，ここでは詳述しない。）

しかしながら，ハムレットの愛に立脚してその言葉を，その一挙手一投足を追っていく時，そこには一貫して変わらぬ「愛」というものが見えてくるはずである。（それは，拙論，第一部，第二部において，第一章から第五章に至るまで詳細に見てきたことである）そうなればやがて，劇の最終幕，第五幕第一場に至って，ハムレットの語ることになる "I lov'd Ophelia." を耳にして，もはや単純なる唐突と違和感に襲われることはあるまい。

あ と が き

シェイクスピアの四大悲劇の第一作『ハムレット』は，これまで手に取って読む度に不思議というか，不可解で腑に落ちぬ思いに捕われてきたものであった。その不可解さの元は，第五幕第一場の "I lov'd Ophelia" に始まる，例のハムレットによるオフィーリアへの愛の宣言とでもいうべき言葉であった。そして今，この何年来の不可解さ，腑に落ちぬが故の落ち着きのなさに，なんとかひとつの解決の糸口を見出し得たような思いがしている。

本文に述べたことと多少重なる部分もあるかも知れぬが，その不可解さ，落ち着きのなさとは，以下のようなものであった。

“I lov'd Ophelia” ——この言葉に行き着く度に，「どうも困るなあ。今更こう言われても困る。あれほど放置しておきながら，その女に向かって——しかも当の女は死者である——この期に及んで「愛していた」と言われたのでは困る。」そんな思いに捕われてきた。いや，困るだけではない。いかにも取って付けたような愛の証言ではないか，と文句のひとつふたつも言わずにおれぬこの愛の表明なのである。第一に，第三幕第一場，第四独白の直後にオフィーリアの前で，さんざんに女への呪詛を並べ立てておいて，世を捨てよ，尼になれと言い放ったその張本人が，今更「愛」を口にするとは何事！　仮に愛していたとしても，あの時点で女を自身の方から遠ざけたのではなかったか。それを，既に物言わぬ姿となった土中の女に向かって「愛しておった，実の兄が4000人結集したところで，この自分の愛に対抗することなどできぬ，それほどに深く熱き愛である」と叫ぶなど，いったいどういう了見であろう？　人を馬鹿にした話ではないか。当の女，オフィーリアばかりか，劇作品の読者・観客をも愚弄する言動ではないか。このようなハムレットの愛など，信じるわけにはいかぬ———。舞台のこちら側から発せらるる，その怒りと不承知の声にこの王子（いや，もっと言えば，彼の創造主であるシェイクスピアは）返すべき言葉があろうか。

仮に，「復讐」という大義成就の必要から，狂気を装い，女を驚愕と失意に陥らせたことについては大目にみるとしても，愛を失い（少なくとも，オフィーリアはそう感じた）父を失い，果ては狂乱に至るその不幸の咎めの一端は負わねばなるまい。その咎の痛みを感ぜずして——実は劇中，一度としてその旨の言葉を発してはおらぬハムレットである——「愛」など口にして良いものか。第三幕第一場，ハムレットの狂気を確信するに至った後，嵐のように女を襲った不安と喪失感，その困惑をまったくの関心外に置きながら，最終幕のこの期に及んで「愛しておった」とは笑止千万である。更に，兄レアーティーズに対抗せんとして，大仰にオフィーリアへの愛の証しを立てんがためならば，どんな難事も厭わぬと豪語して憚らぬその演じられた豪胆ぶり。いずれも独りよがりの偽善めいたものを感じさせずにはおかぬ振る舞いである。解決のつかぬ疑問と懐疑は，劇の創作者シェイクスピアの意図に対してさえ，疑いの目を向けざるを得ない，第五幕第一場におけるハムレットの愛の宣言ではある。

ところがある時，第二幕第一場，オフィーリアがハムレットの異変を父ポローニアスに告げる場面を読み返していて，そこに語られる詳細な描写に目を奪われてしまった。ここは，オフィーリアがひとり居室にいるところへ突然現れたハムレットが激しい変様ぶりを見せて「ハムレット狂乱」を強く印象付ける場面である。それまで，最も信じやすき乙女を第一目撃者に選ぶことによって，効果的に「狂気の王子」を演じようとするハムレット」としてしか見てこなかったのであるが，このときは何故か，描写そのものに注意を引きつけられてしまった。事細かに見た通りのことを父に告げるオフィーリアの言葉が，「狂乱」を目撃した証人としての言葉・語りとしてだけでなく，ハムレット自身の心情を映す言葉として訴えてき始めたのである。その心情とは，言葉に，いや，声に代えて，その仕草をもって伝えんとするハムレットの心情，声ならぬ声をその一挙手一投足に託して告げんとするハムレットの切なき心情である。しかもこのとき，言葉を禁じられてなお恋するもの，愛するものの心情は，愛されるものであって同時に語り手でもあるオフィーリアを媒体として描かれている。(ハムレットの切なさはいっそうに増すに相違ない）それを選んだのはシェイクスピアであった。この観点を得たことは，第二

幕第一場の意味ばかりか，第五幕第一場のあの愛の宣言，そして劇中に描かれたハムレットの愛そのものの意味をも一変させてしまったのである。

そして，この第二幕第一場の意味を問い直す機会をなかば偶然に得たことを発端に，ハムレットの愛について再考を余儀なくされたのであった。第二幕第一場がまったく新しい顔を見せ始めたため，第五幕第一場の愛の表明が決して遊離した，唐突なものではないのではないかといった観点を与えられることになったのは言うまでもない。その再考の経緯の詳細は，本文（論考の第二部，そして前回の第一部とあわせて）に述べた通りである。そしてまた，殊更に“I lov'd Ophelia”と言わせしめた劇作家シェイクスピアの意図を測りかねて首をかしげてきたこの幾年かの，もやもやとした落ち着きのなさ，腑に落ちぬ思いもいくばくか緩和された思いでいる。

機会があれば，今度は女性人物に目を転じたいと考えている。ハムレットが苦悩の源――“Frailty, thy name is woman”という言葉に集約されている苦悩と懐疑の源であったと思われるオフィーリアとガートルードを関心の中心に置いて，この作品を考えてみたいと思っている。

今回の「あとがき」は，第一部，第二部をあわせた全体の内容を踏まえたものとして記させていただいた。紀要第41号に引き続き投稿機会をいただく幸いにより，王子ハムレットに関する論考に一応の完結を見ることができました。ここに御礼を申し上げます。

注―「ハムレットはオフィーリアを愛したか」第二部

1. オフィーリアが囮として放たれていることに，ハムレットはまったく気付いていないのか，それとも始めから気付いているのか，あるいは，途中から気付くのか，その点については解釈の分かれるところである。
   たとえば，途中で気付くとする場合，問題の場面の第130行，“Where's thy father?”と言うハムレットの台詞に注目して，この唐突な問いかけ――問いの唐突さをヒントに，ハムレットが（オフィーリアが囮ではないかと）怪しんだ瞬間を表わすものとして解する場合である。現に，そうした演出，解釈を提示する演出家，研究家もある。確かに，「家に居るなら，閉じ込めて外に出すでない」と言い置き，すぐさま立ち去ろうとすることから，ハムレットがオフィーリアを囮として察知して警戒した，と考えることは十分可能である。
2. 大修館注釈書では，この“the noble mind”という表現を，オフィーリアにそぐわぬものとして退け，そこに「彼女の身のこわばり，言葉のぎこちなさの反映を見ている。更に，その原因を父ポローニアスの「作為，操作」にあると説いている。しかし，この説明では，読者，あるいは観客を十分に納得させる力を持つとは言いがたいのではあるまいか。
3. 第一幕第二場，ハムレットは，母ガートルードとその義弟クローデイアスとの再婚に対して，近親相姦の罪を帯びる好意として嫌悪感を露わにする。作中‘incestuous sheets’（Act I . ii , l. 157）という言葉がそのことを端的に示している。当時は，血縁関係になくとも，兄弟姉妹といった縁者間の結婚を忌避する習慣があった。そして仮にそうであれば，エリザベス朝の観客もまた，劇場において同様の拒絶感を持ってこの言葉を聴き，ハムレットに共感したということになるであろうか。
4. 第三幕第一場の“Where's thy father?”については，既に注１で触れたが，少し補足しておきたい。補足というのは以下の点である：
   一見，ハムレットが秘かに立ち聞きする王とポローニアスの存在に気付いたかと思わせるこの台詞。実は，観客に与える劇的効果を狙ったものであるとする見方についてである。この観点に立つと，観客は予め，先の二人が物陰に潜むことを知っているため，この台詞を聞いた瞬間「さてはハムレット，気付いたかな：（既に）気付いていたのか？」と，思わずドキリ！としてしまう，というわけである。ところが，実際にはハムレット自身はまったく気付いてはいない――そこに生まれる不思議な効果，それを狙っての作劇であると。編注者は，この劇的効果を「ドラマティック・アイロニー」という言葉によって表している。（参照：大修館注釈書，後注pp. 401-402）

確かに，面白い解説法である。しかし，ひとつの疑問が生じる。即ち——では，この直後 'Farewell' という言葉とともに，立ち去らんとする素振りを見せている点についてはどう説明するのか。それも偶然の言葉，あたかも，「鼠ども，立ち去れ」と言わんばかりの退去命令を（物陰に潜む怪しき者どもに向けて）放ったかに聞こえる，ただの偶然の言葉とするのか？　あるいは，囮にかかる危険を避けようと，早々に立ち去ろうとしたかに見える「さらば」という言葉にすぎぬ，とそう解して済ますのか，そうした疑問がやはり残る。

＊　本文，及び後注に用いた引用はすべて『ハムレット』大修館シェイクスピア双書，高橋康成，河合祥一郎編注（大修館書店，2001年発行）からのものである。

参　考　文　献

1. 高橋康成，河合祥一郎編注，『ハムレット』大修館シェイクスピア双書，大修館書店，2001年
2. 市川三喜，嶺卓三注釈，*HAMLET*，研究社詳注シェイクスピア叢書，研究社，1993年，（初版1963年）
3. Harold Jenkins ed., *HAMLET, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare*, METUEN, London and New York, reprinted in 1986, first published in 1982.
4. Philip Edwards ed., *HAMLET-Prince of Denmark, The New Cambridge Shakespeare*, Cambridge University Press, 1988, first published in 1985.
5. 坪内逍遥訳，「ハムレット」『沙翁全集——逍遥訳シェークスピヤ全集——第一巻』，」1994年復刻版第一刷発行
6. 中西信太郎著，『シェイクスピアの世界』英宝社，1967年
7. 青山誠子著，『シェイクスピア女たち』研究社選書17，研究社出版，1984年，初版1981年
8. アーネスト・ジョーンズ著，栗原裕訳，『ハムレットとオイデイプス』，大修館書店，1988年
9. ジョン・アップダイク作，河合祥一郎訳『ガートルードとクローデイアス』白水社，2002年
10. 小林秀雄作，「おふえりや遺文」『日本現代文学全集68—青野秀吉・小林秀雄集』，講談社，1980年，初版1962年（但し，問題の文の執筆は昭和６年：1931年）
11. 福田恒存監修，『シェイクスピア・ハンドブック』三省堂，1987年
12. 日本シェイクスピア協会編，『シェイクスピア案内』，研究社，1990年，初版1964年
13. 松元寛著，『シェイクスピアの全体像——仮面と素顔のあいだ——』，研究社，1986年
14. 河合祥一郎著，『ハムレットは太っていた！』白水社，2001年

—平成19年10月26日　受理—